



都市創造学部の正念場

亜細亜大学都市創造学部 学部長

松岡 拓公雄

学部開設以来早いもので6年目が終了する。この間、各教員果敢に何事にも挑戦してきた。みなさんの役割分担は重くなり内容も増えるばかりで課題は山積みであった。大学運営、教育に力が集中し個々の研究に没頭できる教員は少なかったのではなかろうか。今年度も2年前からのコロナ禍対応に追われた一年となり、学部教育の根幹となる留学課題対応と教員の大幅減少、加えて創立時のメンバー退任の人事が始まる大きな山を迎えた。この逆風を突き抜けていくため、他の大学に先駆けてのアメリカオンライン留学（英語と国際感覚）とオンライン就業体験に取り組んだ。関連した様々な問題も浮上し学ぶことも多かったが、その方法や対応はFD・SDの発表でも高く評価されまずは成功であった。実留学は難しくなり何とか様々な問題を乗り越えてアメリカ留学のみは実現出来た。予期せぬ壁が立ちほだかるもアメリカ担当の岡村先生を中心としてチームは綱渡りの中、実行に移すことができ次に繋げていく大きな成果であった。

留学に限らず学生のためにできるだけことはやり切るという強い意志で教員は踏ん張っている。新型のオミクロン旋風の中を突き進み実現させたことは、都市創造学部そのものの存在意義が問われ危機意識を持ち教員職員ともパワーを結集しあらゆる面で一枚岩となった成果である。次年度は通常の留学に戻ることを念じながら特に担当教員は各国の情報収集と休む暇が現在もない。

学部立ち上げの要であった伊藤善夫先生が残念ながら転学され、その穴埋めは後任人事合格者の辞退で失敗に終わった。この人事は次年度に持ち越さざるを得なくなったが、教育体制に大きく影響する事から新学長の計らいで特任准教授枠をもらい、専属の英語教員や非常勤講師、安登先生の後任の李立栄教授の採用で次年度を乗り切る体制だけは確保した。同時に大学院設定の振れから担当学部教員の過剰な負担の問題も浮き彫りになり、学部教育とも常に連動していることからその改善が今後も強く求められている。新学長になりようやく少しづつメスは入り始めた。今後、安登先生から始まり、毎年一人づつしばらく退任が続く、その創設時のメンバーは実務経験者が多いが引き続き、様々な現場を知る実務教員の補充は特徴のある学部にとって重要課題であろう。

これからの都市創造学部に押し寄せる大きな波を逆手をとって上手く賢く乗り越えていくことこそ創造であることを常に意識したい。大学の古い体質を改め、時代に合わせていくと同時にそこから見える未来を予測し魅力ある大学にしない限り、これからは学生は見向きもしなくなるという大学全体に危機感が薄い。都市創造学部は常に未来を見据えているが大学改革の旗振り役も求められてるように思う。課題としてしばらく続くいていくことになるだろう。

世界の情勢は平和を願う人類の方向とは思えない、まだ国土拡大を目指す国があることが現実である。また我々の住む地球環境が危機的な状況である認識は高まり、国際環境会議でもCO2排出量削減の目標は宣言されても温暖化は止まらない。加えてこの長引くコロナ禍が世界を覆い不安定な時代となっている。この世界を担っていく若者には厳しい未来が待っている。だからこそあらゆるシーンでそれらに立ち向かう夢をもったグローバルな学生を輩出する都市創造学部の役割はさらに大きく強く求められている。